

陣多ケレ共渡シテ勝ズト云事ナシ、縱水増テ日來ヨリ深ク共此川、宇治勢多、藤戸、富士川ニ増ル事ハヨモアラジ、敵ニ先ヅ渡サレヌサキニ、此方ヨリ渡テ氣ヲ扶テ戰ヲ決候ハソニ、ナドカ勝デ候ベキト申ケレバ、國司合戰ノ道ハ勇士ニ任ルニシカズ、兎モ角モ計フベシトゾ宣ケル。
〔東遊雜記〕越谷の驛より、柏壁の驛まで二里廿五丁、この所よき驛にて倡家多し、古利根川と稱する川あり、寛文のはじめ年の頃までは戸根川此地に流れしに、洪水によりて今のごとく川筋替りしと云。○戸根川は源廿餘里、幾筋とながる、川々流れ落て、栗橋のかみにて一流となる、聞しよりは大川にて、世に坂東太郎と稱せるは此川の事なり、二百石積計の川舟ありて、江戸へ往來す。

〔類聚名物考地理三十二〕江戸川 北條五代記卷九に今は諸國治り天下太平、四海遠く浪のうへまでもをだやかにして、靜なる御時代なり、然れども兵船多く江戸川につなぎ、おき給ふと玄るせり、今案に此江戸川はいづこにやさせる跡さだかには玄れねども、おそらくは今の隅田川にや、また今當時江戸川といふは新利根川のことにて、眞間國府臺の下を行く行徳川の事なり、此川關宿以上、上野下野より、江戸への運漕の川故しかいへり、下は行徳にいで海に入、それより横に續きて小名木川通り、淺草川へ續けり、是をも江戸川といふなれば、いづれともさだかには云ひがたし、いづれこの二には過べからず、されば宗祇の東土産、永正六年或人安房の清澄を一見せよかしと誘ひしに、いづこかさしてと思ふ世なれば、立歸りて江戸の館の御許に一宿して、角田河の河舟にて、下總の國葛西の府の内を、半日ばかりよし蘆をしのぐ、折しも霜枯は難波の浦にかよひて、隠れて住し里も見えたり、鷺鴨都鳥、堀江こぐこ、ちして、今井といふ津よりをりて、淨土門の寺淨興寺にて、迎へつる人まつほどに云々とあり、この今井津は今之行徳の今井の渡なり、角田川の河舟といへる、全く今の小名木通りにちがふべからず、尤も坂佐井通り、今の堅川に